

小林清市著

中国博物学の世界

——「南方草木状」「齐民要術」を中心に

農山漁村文化協会／2003年9月／430頁／6476円



森村謙一

一 本書の成立事情と内容構成

本書は、基本的には山口大学教育学部在職中、一九七七年に四七歳で急逝された故小林清市氏の遺稿集である。本書「序」（山田慶児・京都大学名誉教授）、および「解説」、「あとがき」（共に武田時昌・京都大学人文科学研究所教授）で詳細に説明されているように、生前に加わり活動していた中国科学技術史関係の共同研究に関連するものを含め、同氏が遺した論文や未発表草稿について、同氏と京都大学文学部哲学科中国哲学史専攻同門の方々を中心に検討がなされ、武田教授および木島史雄愛知大学助教授が主となって編集された。

序—山田慶児

第一部 『南方草木状』の研究

南方草木状巻上並びに序（訳注）／南方草木状巻中（訳注）／南方草木状巻下（訳注）／『南方草木状』（影印版）／『南方草木状』解題—桜井謙介（塩野義製薬研究所研究員）／『本草綱目』の記載方法に関する一試論

第二部 『齐民要術』の世界

『齐民要術』における五穀と五木／『齐民要術』にみる醸造の呪術／『齐民要術』の求めた味／『齐民要

術」のなかの家畜の病 第3部 中国博物学縦覧

陸疏の素描／虎豹を食う怪樹の話／清朝考証学派の博物学——『爾雅』積草篇注を手掛りに——／経学者の昆虫観——『蝶蠶』の生態を手掛りにして——／魏・晋時代の蟬——美化された背景を探る——／中国古代の昆虫観——『蟻』を手掛りに——／雁の四徳について
解説——武田時昌

小林清市略歴および研究業績目録
あとがき——武田時昌

二 本書の内容

目次に従って総覧し内容を紹介する過程で、論評も併せて試みる。

第一部 『南方草木状』の研究

1 『南方草木状』全文訳注

西晋末（西暦四世紀始め頃）襄陽太守・稽含の編とする当植物書の全文訳注が、底本とした宋・左圭輯『百川学海』所収の原文・影印版と併せ取められている。当業績は、山田慶児教授が人文研在職當時から日文研に移った後まで主宰された

共同研究で、会説のテキストの一つとしてこの書を選定された時期に、小林氏がその会説の纏めと整理を担当され、訳注完成の努力をされた成果である。

A. 各版本の比較検討、文章校勘、引用文・引用句の出典確認、原文に対する注釈の検討

文章処理面には全く問題はない。正しく古典訓古学・古典注釈学の方法に則り厳密に為されていて、結果の訳注文は完璧である。

B. 各植物の同定

その正誤については、原著『南方草木状』自体が持つ基礎的情報の限度による制約があるので、以下まず『南方草木状』自体について、特徴・問題点、およびこの際の注意点・自然科学書として扱う際の限度を改めて説明する。

〔『南方草木状』の特徴・問題点、およびこの際の注意点〕

イ. 最も著しい特徴・独自の価値は、『南方草木』を記述している点であって、この書には実際には北方系の種類も少し混っているが、伝承のとおり四世紀初

めとすると、その時代に、植物とは限らずおよそ地域物産で大部分「南方もの」を選んだ構成は希有であり、こうした構成はかなり後の時代でも多くはない。

ロ. 『南方草木状』の編者は従来、標記のとおり西晋末・稽含とされてきたが、その真疑は以前から問題にされている。

実は本書に取められている論文のうちの一篇は、『南方草木状』を高く評価し『南方草木状』の記載を多く採り入れた後世の或る本草書に対する、該当部分の網羅的な文献考証によって、この問題に鋭く切り込んだ内容である。当書評では、小林氏の論考から離れて編者稽含真偽問題を論ずることは控えるが、編者稽含真偽問題を別にして、一般に植物等・具体物を記述している古典文献を、科学史研究資料として観る場合の注意点、すなわちその時代の自然科学の水準を示す歴史上の書として検討する際の注意点を基に、『南方草木状』自体が持つ、基礎的情報の限度を以下に指摘しておく。

ハ. 全体の編集者とは別の者が、個々の植物を観て記述した可能性がある。

従つて、実際に記述した者が、それらの植物が自生あるいは栽培されている地域で、どれほど確かに実見した上で記述したか、その判定が重要である。

『晋書』葛洪(道家の立場で神仙術、政治、道徳を説いた『抱朴子』を著した)の伝では、稽含が南方、広州に赴任していたとあるが、同じ『晋書』の稽含(本人)伝では、稽含は河南の人、長じた後、はじめて広州へ赴任する前に死去(殺害された)とあり、また他の記載でも異説あつて、要するに史書類での稽含の消息は錯綜しているという。しかしそのことは決定的な要素ではなく、稽含と限定せず、広州と限定せず、さらに編集者のみに限定せず、実際に記述した者が、実物をどれほどよく観て描いたかの判定が最重要である。

原文植物記載の部分部分が、分類、形態、生態、生理等、植物学上の色々な面で、該当実物とされる植物にそれぞれどれほど当てはまるか、綿密な検討が必要である。

二、図はない。具象物を論じて、文章

記述を補う説明的な図を欠くというのは、論じている対象の把握理解に非常な困難を伴うが、『南方草木状』については「図が描かれ添えられた」との記録もない。ちなみに古い本草書でも図はない。

ホ、小規模の書である。上記原文影印版全体が本書内で三〇頁に収まる。

採り挙げている植物の数は八〇種ほど。各種類・別名、産地、大小、形状、有用性、等についておおむね漏れなく言及しているが全体にざらりと述べている。古代の記載としては客観的ではあるが、後の時代の本草書での記載レベルと比較すると物足りない感はある。

本論・全文訳注の植物同定に戻つて、なお問題点を挙げる。

近年『南方草木状』の研究は急速に進んでいる。全文訳注の植物同定のために主に参照・引用された植物文献の一つ、吳德鄰『詮釈我国最早の植物志—南方草木状』(『植物学報』第七卷第一期、一九五八年、所収)は、発表された時は確かに優れた先進性を持っていたが、全文訳

注が進行していた時点(早くとも一九八〇年代末)には、さらに新しい考究が発表されていたのではなからうか。またおよそ植物では分類学的に同種に判定されても、生息地域の違いによる形態的、生態的、生理的差異がかなり著しい。言い換えると、分類学上の「種」範疇は意外に大きなまとまりで、中国と日本・地域の違いで同種でも歴然と判別できるほど、見掛けの様子が異なる場合が多い。まして『南方草木状』は広い中国の最南辺の植物を記述しているのだから、同定は、現地で実物をつぶさに検討して著わされた植物文献を最優先に探索して参照することが望ましい。

C. 挿図について

今回刊行に際して、全文訳注の各植物全てに挿図が付されている。

本書第一部『南方草木状』の研究のタイトル頁の次頁——「凡例」で、「底本には図はないが、適宜、上海市歴史文献図書館蔵『南方草木状図』から当該草木の図を補い、参考に供した」、同じ本書一一〇頁「附記」には「挿図は上海市歴史文

献図書館欠名絵『南方草木状図』によつた。この植物図は必ずしも正確ではない」とある。

それらの各図からはいずれも芸術的で高雅な印象は受けるが、困つたことに、上記「附記」で認めているように「正確ではない」箇所、植物の種類として誤つたものを描いている分がある。誤りを指摘することが書評ではないが、その一例を挙げる。

二八一―二九頁「乞力伽」解説文は「朮(オケラ)のことである」とし、学名もオケラのそれを充て、『本経(神農本草経集注)』をはじめ、歴代の代表的本草書から注釈句を引用して、文面では何ら問題はない。にもかかわらず、図はオケラではない。図の地上部、ことに花の様子がオケラとは全く異なる。

2 『本草綱目』の記載方法に関する一
試論

当論は、題目からは『南方草木状』とは関連が薄いようで、実は『本草綱目』での『南方草木状』の取扱方とその帰結を滔々と論じたものである。従つて、第

一部に入れられて当然である一方、およそ小林氏の研究全般に通じる方法論を如実に示している点で、同氏の他論文のどれにも通じる点がある。

読み入ると「はじめに」の後、直ちに「一『南方草木状』について」とあり、ごく短い「一 構成」の後「二 偽書の疑い」――「南方草木状」が後世の偽書であることについては、すでにいくつかの論考があるので、ここでは詳説しない。その論拠の概略は次のとおりである。筆者(小林氏)もまた、『南方草木状』は少なくとも稽含の撰ではあり得ないと考えている」とある。その論拠は、

(イ)『隋書』経籍志、『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志に『南方草木状』の名が見えない。(ロ)撰者とされる稽含と植物誌の接点がない。(ハ)六世紀前半の後魏に成立した『齊民要術』には『南方草木状』の引用がある。ほとんどの記述は今本『草木状』と同一でない。(ニ)「乞力伽」の条にみえる劉涓子は東晋末(四世紀末―五世紀初)の人と思われる。

したがって、西晋の永興年間(三〇四―三〇六)ごろに活躍した稽含の撰ではありえない。(ホ) (略)。問題は(ハ)である。……(中略)この間、論者によつて『南方草木状』と『南方草木状』の異同解釈、混同の錯綜が見られることを端折つて紹介)……

しかし、李時珍の『本草綱目』には、ただ一例を除いて『南方草木状』と『南方草木状』の混同はない。その一例以外の『本草綱目』所引の『南方草木状』は、すべて今本『草木状』の記述と一致している。

(以上、原文の引用を少し長く続けたので、所々、書評者の責任で略しあるいは約めた)

この後、小林氏は『本草綱目』所引の『南方草木状』として、『本草綱目』の『南方草木状』引用頻度を示すための、かなり膨大な表を作成している。さらに、「李時珍の評価と操作」として、「筆者(小林氏)の関心は、李時珍が『南方草木状』をどのように評価し、利用し、操作した

かにある」と述べて、さらに「李時珍は『南方草木状』によって、次のような作業をおこなっている」と断言し、それを以下の四点に纏めている。

a. 『南方草木状』を典拠に、新付の藥物を選定した——新付。

b. 『南方草木状』によって植物の異名を検索し、また命名の由来を検証した——釈名。

c. 『南方草木状』によって、諸家の誤謬を正した——正誤。

d. 稽含『南方草木状』こそ信ずるにたるものとし、『南方草物状』の存在を消去しようとした——操作。

そして以上の四点についてさらに詳しく分析を試みている。(紹介略)

次に、『齊民要術』から十六条の、『証類』(証類本草。いく通りもの版があるがここでは一〇一九年成立の証類大観本草)から若干の、それぞれ『南方草物状』引用を挙げて、李時珍の操作(『南方草物状』を消去し、『南方草木状』名に一本化した上で、その記載を利用したとの観点)の傍証を試みている。そして最終的に、

「むすびにかえて」でそれを結論化し、「……このような絶えざる文献操作こそ、李時珍本草学の本領ではなかったか」としている。

以上、小林清市氏の、『南方草木状』研究から発展した、李時珍『本草綱目』編纂過程の徹底的批判には敬服するが、それだけで『本草綱目』そのものの価値否定とすることがもしあればそれには肯定しない。『南方草木状』関係以外にも、伝統的な古典訓古学・古典注釈学に近い立場から、李時珍は古典引用に際して恣意な改竄をあえて行つたとの批判があるが、一方、よく知られているように書の構成や記載の仕方、記載内容等で諸改革を断行して、科学史上、古代の本草学から近代博物学への進展に大いに寄与したとの評価も高いのである。

第2部 『齊民要術』の世界

この部には、1 『齊民要術』における五穀と五木、2 『齊民要術』にみる醸造の呪術、3 『齊民要術』の求めた味、および4 『齊民要術』のなかの家畜の病、以上四編の論文が収められている

が、この、後魏(西暦六世紀中頃)賈思勰編著の農書『齊民要術』に関しては、小林氏が本来、京都大学農学部林学科を卒業された自然科学者であり、上記、京都大学文学部へ改めて学士入学された経歴に関連して、共同研究との関連はあるがむしろ、個人的な探求方向として終始考究しておられたテーマである。当然、早くから着手されていて、本書には収録されていないが「研究業績目録」、「解説」によれば、一九八四年修士論文として発表された「虫から見た『齊民要術』」から始まっている。

さらに一九九七年の最後の業績が上記4 『齊民要術』のなかの家畜の病であり、そして最初と最終の上記二論文の間に、やはり本書収録の残りの上記1、2、3の三論文が出ているので、それらを通じると、大きなテーマの一つとして『齊民要術』に的を定めて、具体的にはその都度サブテーマを変えながら、さほど間を置かずに考究を纏めたと分かる。いづれも文献考証学、注釈学の手法で資料文献を綿密に検討していて、方法論として

表1

五穀	禾麦	粟	黍
五木	杏	桃	李

表2

五穀	禾	黍	大豆	小豆	麻	大麦	小麦	稻
五木	棗楊	榆	槐	李	楊荊	杏	桃	柳楊

表3

五虫	五行	鄭玄注『月令』	高誘注『呂氏春秋』
鱗虫	木	蛟龍これが長為り	竜蛇の属 竜これが長為り。魚属。
羽虫	火	鳳凰これが長為り	飛鳥の属 鳳これが長為り
倮虫	土	聖人これが長為り	虎豹の属 恒に浅毛 麒麟これが長為り
毛虫	金	麒麟これが長為り	狐貉の属 旃毛生ず 虎これが長為り
介虫	水	神亀これが長為り	龜鼈の属 介は甲なり

は四論同一で、参照他文献の範囲もほとんど重複している。1 『齊民要術』における五穀と五木」が、他の三論と比較してサブテーマの基本性のゆえに論考規模が大きいのので、この論文を当部四論の代表とみなし、内容をやや詳細に紹介し評する。

1 『齊民要術』における五穀と五木

五穀と五木（五果）が、古くから想定されて来た五行概念と繋がっていることは言うまでもないが、実際にはたやすく五行に、また相互に振り分け、固定されてはいない。「はじめに」に言うように呪

術的思考も介在している。

1. 『齊民要術』にみられる五穀と五木の相関

当論では小林氏はこの相関をまず「虫を介して両者の関係を説くもの」で捉えた。次の表1である。

ここでいう「虫」は現代の昆虫概念とは全く異なり、高等動物のことである。次いで、「穀の母胎としての木」として相関を探った。表2である。

「虫」自体、すなわち動物相も五虫分類によって五行体系に組み入れられているという点で、『大戴礼』『呂氏春秋』十

二紀あるいはそれを継承した『礼記』、それぞれ別の相関の考え方を次の表3に纏めている。五虫—五行の対応は各書で共通しているが配当基準の解釈は書によってやや異なっていることが分かる。

五虫は動物相の形態や生活史をふまえた上で分類基準として働いているので、優れた分類法でもあったと評価している。また『爾雅』の動物解説で設定されている「積虫」（五虫に含まれない小動物）、「積魚」（五虫のうちの鱗虫と介虫）、「積鳥」（羽虫に相当）、「積獸」「積畜」（この二篇に毛虫と、鄭玄のいう倮虫が含まれる）の各篇は、『爾雅』なりの分類基準としてしている。

ロ. 植物分類と五穀と五木

前述のように動物については『爾雅』の篇分けが優れた分類基準になっているのに対し、植物については『爾雅』は「積草」「積木」の二篇に分けているのみ、別資料でも例えば『山海経』で竹の分類を決めかねて混乱しており、唐『芸文類聚』に至っても草と木の二分法の域に止まっていたので、植物相の分類基準は未発達

であったと小林氏は述べているが、この結論は少し速断に過ぎるのではないだろうか。「五虫は動物相の形態や生活史をふまえた上で分類基準として働いているので、優れた分類法でもあった」とするならば、植物に関する他の世界、「本草」の世界では『藝文類聚』と同じ唐代、『新修本草』が植物品目を草部、木部、果部、菜部、米等部に整然と分けている（草部は抜きん出て種類多く変化に富むので、さらに上品上下、中品上下、下品上下、計六篇に小分けしている）。植物の諸相を五行に配当する基準を、異なる資料で

各々独自の考え方を整理して統一的に見いだすことは困難なようで、「……植物はもとより木である。木である物をさらに木、火、土、金、水に配当しようとするれば、無理の生ずるのは当然である」と結論している。五穀、五木が先行しているので錯綜に輪を掛けることにもなる。「竹」を独自の篇としていらかどうかで植物分類基準発達程度の尺度とするのは少し無理で、竹は温度と水分が共に充分保証される処でのみ生育する植物だから、北部

から西部へかけて基本的に小雨乾燥気候地の植物を対象とする場合、竹は存在感がなく、意識され難い。

ハ、五穀・五木の相関の意味―むすびにかえて

前述したとおり、『齊民要術』では五穀と五木が「虫を介して」また「穀の母胎として」対応している。それらの対応がどのような理に基づいているか、他の資料で同様の対応を探り、『齊民要術』との関連を考えている。まず『師曠占』、『爾雅翼』を当たって、前者は該記載の量が、後者は独創的に過ぎて共に不十分とし、李時珍は五穀と五木の相関関係に注目した数少ない論者の一人と認めながらも、『本草綱目』では『齊民要術』のいう五木について十分な考察を加えないまま『素問』の五果説を流用し、その結果、『素問』の五果に含まれない柳、楊、榆、槐などを無視した点で妥当性を欠いており、『素問』に拘泥するあまり『齊民要術』の主旨から逸脱してしまつたと言わざるを得ない」と手厳しい。「五穀と五木の相関に「虫」を介在させた『汜勝之書』、

崔寔、『雜陰陽書』、『師曠占』の記述は、生物相互の関係を生態系として捉えたものとして注目され、『齊民要術』もその観点に立っているので、記載されている播種、育成、除草、除虫、施肥なども、生態系という観点から捉えなおす必要がある」と結んでいる。

第3部 中国博物学総覧

当部には七篇の論文が発表された年次順から少し違えて、題材の範疇別に三つのグループ順に並べて収められている。以下、そのグループ分けを明示し各論文を寸解する。

A. 始め三篇・古典文献の博物誌的検討。言うまでもなく文献考証注釈手法。

1 「陸疏の素描」

『陸疏』は『毛詩草木鳥獸虫魚疏』の略称。『陸疏』の詩注としての早期性、量の多さ、名物学としての質の高さを認めているが、撰者および成立期の特定に疑問が残るとする。まとめで、詩中の生物の同定、異名蒐集、分類、生態把握に秀れた生物誌と評価している。

2 「虎豹を食う怪樹の話」

冒頭、「中国哲学と博物学との奇妙な関係」と小題を掲げて、自己の専攻、基本の注釈学と本草学、博物学の取り合わせについて述懐している。論内容は「詩経」に登場する「駁」（はく、駁とも表記）の話で、古の詩注二大権威、『毛伝』『鄭箋』で駁に怪獸説が生じたが、想定が突飛過ぎ、『陸疏』（前記）が、怪獸ではなく広葉樹「梓榆」（日本の「まゆみ」近縁種）のことで、樹皮の青白色が入り混じり、遠くからは馬のように見えると、妥当に解釈したと説明している。

3 「清朝考証学派の博物学——『爾雅』釈草篇注を手掛りに——

一八世紀から一九世紀にかけて、欧米主導で博物学が世界的に近代化しつつあった時期に、膨大な資料の間を往来しつつ厳密な校定と詳細な注釈に専念する、古いスタイルをかたくななまでに守り通した一派が清朝考証学派であるという。彼等は動植物、つまり「もの」をどのように見ていたか。『爾雅』釈草篇の歴代の注、特に東晋・郭璞と清・郝懿行のそれに焦点を当てたとある。

B. 次の三篇、古典に出ている「昆虫」の検討。つまり今の「虫」の話になる。

4 「経学者の昆虫観——『蝶蠹』の生態を手掛りにして——

経学者は儒教の經典を遵守した古の人たち。研究方法論では前記、清朝考証学派の先祖筋である。「蝶蠹」という昆虫（ハチの或種）の生態を、経学者は經典にとられ把握できなかった、というよりこの人たちに「物」の究明を期待するのが無理。本草家たちは人により錯誤はあったが、正しく理解したとしている。

5 「魏・晋時代の蟬——美化された背景を探る——

蟬は長い地中期の後、地上に出ると直ちに脱皮し、美翅を震わせ美声を発する。露を吸うだけで何も食べない。そこでこの時代、ことに尊ばれた「清廉、清貧」の象徴となっていた。

6 「中国古代の昆虫観——『蠹』を手掛りに——

「蠹」は「タガメ」もしくはその類の水の中昆虫であるが、その実像が綴られるのは西晋の張華『博物志』以降のこと。よ

り古い時代には「淫気から生まれ、姿形は見えず、災いを為す」存在で、その寓話がもつばら訓詁伝承された。「政治がそのような物語を必要としていたのである」と述べている。

C. 最後の一篇、珍しく「鳥」を探り挙げています。

7 「雁の四徳について」

『本草綱目』の「雁に四徳あり」に依っている。李時珍の説明、几帳面な「渡り」が信の徳、序列正しい「雁行」が礼の徳、ところが残る二つ、「番いの貞節」が節の徳、「夜宿時の交代警戒や蘆をくわえて鳥網を避ける工夫」が智の徳、は疑問視している。李時珍が典拠を明示していないとの指摘もある。

おわりに

以上遺された業績は、一つの正統手法を忠実に履行しながらも、独自の道を力強く切り開いてゆかれた学究の真摯な姿勢を如実に示している。存命なら更に更にすばらしい研究を続けられたに違いない。惜しみて余りある急逝である。